

いちご新品種「とちあいか」における栽培方法の違いが障害果発生に及ぼす影響

要約

いちご新品種「とちあいか」の養液栽培は土耕栽培に比べ収量は多かったものの、収穫期間をとおしたB品の発生率は12.0%と高かった。しかし、養液栽培においてB品の発生率が高くなったのは、ハウス内の温度の影響によるものなのか、栽培様式の違いによるものなのかは判然としなかった。

○ 展示のねらい

いちご新品種「とちあいか」の養液栽培、土耕栽培の違いによる障害果の発生程度を比較し、現地適応性を実証する。

1) 試験区概要

供試区：養液栽培、対照区：土耕栽培

2) 栽培（飼養）概要

(1) ハウス構造 南北連棟ハウス 養液（クリプトモス培地）及び土耕栽培

(2) 定植 供試区：9月21日、対照区：9月15～16日

○ 主な成果

収量は、12月、3月以外は栽培期間をとおして養液栽培が多く、10a当たり養液栽培が6,675kg、土耕栽培が5,230kgであった。果実品質は、栽培期間をとおしてB品の発生率は養液栽培で高く、平均で養液栽培が12.0%、土耕栽培が5.7%であった（表1）。

ハウス内の気温、地温は、養液栽培が土耕栽培と比較してかなり高い気温で推移した（図1）。

表1 月別収量、B品率及び廃棄率

		11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	合計
供試区	kg/10a	145	880	1,530	1,255	1,300	1,420	145	6,675
	B品率(%)	28.5	21.1	8.6	5.5	18.3	5.2	71.4	12.0
対照区	kg/10a	133	940	901	849	1,405	995	7	5,230
	B品率(%)	13.6	3.1	6.8	2.6	4.0	10.9	32.4	5.7



図1 気温、地温、炭酸ガス濃度の推移（1/1～1/2）

○ 今後の方向性

初期生育が旺盛なほど障害果の発生が多い傾向があるため、温度管理も含め、基肥量の違いによる障害果の発生程度を検証する。

実施機関：安足農業振興事務所経営普及部 実施場所：佐野市

問合せ先：栃木県農政部経営技術課技術指導班 TEL 028-623-2322 FAX 028-623-2315